
二次元の館

清香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一次元の館

【Zコード】

Z3169F

【作者名】

清香

【あらすじ】

一次元の館へようこそ。JはNAUTや銀などを元にしたBLの世界です。同性愛などを受け付けない方やなにかと原作に関係のある方はお止めください。各話の説明は前書きにありますのでよくお読みになりますようお願い申し上げます。それでは…

君を求める「アスシカ」（前書き）

アスマ × シカマルです。シリアスでちょっと甘い感じ。

君を求める「アスシカ」

ベストを着て、額当てをして任務に行く準備をする音がした。

アスマ。

行かないでくれ。

そつ言いたいのだけれども無理な話だとわかっている。だから黙つて枕に顔を押しつけた。

待っていることが怖いんだ。出て行つたきり、あんたが帰つてこないという愚かな妄想がオレをだめにしそうで。

それでも涙は見せちゃいけない。忍だから、なんて理由じゃなくて、あんたが悲しそうな顔をするから。そんな顔見たくないんだ。

シカマル。

静かに俺を呼ぶ声がする。ああ、これは忍の声。

なに。

自分を押さえつけて言葉少なに返事をする。

いつてくる。

その言葉を聞いて、先を期待してしまつ。帰つてくるからといつ現実味のない言葉を。でも、そんものは有り得ない。

ああ。

適当に返事をしてドアが閉まる音を聞いたとする。なかなか聞こえてこない。おかしいと思つて目を開けるとあなたが目の前にいた。

なんだよ。

しかめつ面で見たら言われた。

待つてろよ。

帰つてくるか、ひ。

あんたの唇から出たその言葉に驚いて目を見開く。身体が制御できない。勝手に動いて、気付いたらキスをしていた。

あんたはオレからの短いキスにちょっと驚いてからオレの頭をなでて家を出でいった。ドアが閉まる音と一緒に愛してる、といつ声が聞こえた。

お願ひだから

帰つてきてよ。

もう一度キスを。

俺はのろのろと起き上がり、まだ薄暗い窓の外を見つめた。

(愚かな自分は待つことしかできない。)

或る夏の夜に「アスシカ」（前書き）

アスマ × シカマルです。本編が会話体で短く、オマケがアスマ視点で長くなってしましました…。甘い感じですかね。

或る夏の夜に「アスシカ」

「署」

「そりやー 夏だからなー」

今夜だせ?」

「まあ熱帯夜もたまにはあるだろーよ」

「それらの理由を除いても何かあるんじゃねーのアスマさん」

ରୁକ୍ଷା

「とほけんじやねーよーあんたが引っ付くからだろーよー」

「んじやーいいい」

「よくねえ」

「怒るなよウシカマル」

「……なんで？」

?

「なんで引っ付く？」

「そりやー好きだから」「…」

「どーした?」

「余計暑くなるからそんな事言つた」

「…だつて好きなんだもーん」

「馬鹿」

「馬鹿じやねえ…変態だ」

「…その変態が好きな俺は一体どーすりやいいんですかね」

「嬉しこ」と囁いてくれるねーシカマル～

「ハセハセ。寝る」

「なんだよーかまつてくれよー」

「…」

「ハセハセ」

「…」

「おやすみ。寝してるや、シカマルちゃん」

「すー…すー…」

或る夏の夜。

1人は夢の中を漂い始めたばかり。

もう1人は暑くて暑くて眠れませんでした。

「あひ~

「すー……むにゅ~むにゅ~…」

「なんか、すげームカつく…」

「ぐおー……む……む……」

「鼻つまんでやるか…」

「む~……む……」

(田が冴えてしまった彼はそつと耳元で告げた。
「愛してるぜ……熊さん」そして優しいキスを。)

オマケ オマケ

「あのや~シカマル~」

朝ご飯を食べている途中でアスマがシカマルに話しかける。

「ん~?」

シカマルは少し眠りつつな声で返事をした。

「昨日の夜、なーんか息苦しかったんだよな……」

その言葉を聞いた瞬間シカマルはギク！と反応してしまう。

「…う、うつ伏せに寝てたんじやねーの?」

誤魔化すしかねえ、と決意を固めたシカマル。アスマは真剣な顔で考えている。「うーん……なんだかなあ……鼻が……ブツブツ」

アスマが小さな声で、しかしねざと聞こえるように呟つとシカマル
は箸を置いた。

גַּתְּהַנְּגָנָה

シカマルはなんとか逃げ切れたな、と思っていたがアスマは見抜いていた。というか知っていたのだ。

アスマはシカマルが鼻をつまんだところから起きていって、驚かしてやろうと思っていた。しかしシカマルが身体を寄せてきた気配を感じタイミングが掴めなかつたのである。黙つて狸寝入りをしていたところに、愛の告白。起き上がりつて押し倒してやろうと思ったアスマだが、狸寝入りをしていたことがバレたら一週間はおあずけだと危機を感じ、自分を押さえつけたのだ。

「（我慢したオレ、偉いぞ！）」

そう思って、止めていた息を吐いとしたら胸に柔らかい物を感じた。

「（んんん！？）」

そつと目を薄く開けるとシカマルの顔。それは一瞬のことアスマはきよとんとしたが隣から聞こえてきた寝息で我に返る。

「（シ、シカマルからキスされた！？ちゃんと味わえればよかつたトホホ。）」

しかし、後の祭り。アスマは歯痒い思いをしながら眠りについたのだった。

「なーにーヤーーヤしてんだよー」の熊ー」

いつの間にかニヤニヤして箸が止まつていたらしい。シカマルに睨まれたアスマは言い返す。

「シカマルのことが考へると、やけちやうんですよーだ！」

「なつ！：変態！スケベ！」

「やめろっ！バカアスマ！」

「むふふん」

「だーつ！」

彼らはとても幸せなのでした。

お
わ
り

或る夏の夜』【アスシカ】（後書き）

「」の前後が一行空いていなかつたり、誤字脱字などほんとうに申し訳ないです。『ごめんなさい…』。それと内容のことなんですが、アスマはキスのこととは黙つていよつと思つているんです。だから「一昨日…」と言つて誤魔化したんですね…。言つたりやつたらおあづけをくらいますからね…。w

迷子【アスシカ】（前書き）

アスマ × シカマルです。なんだかこの こ ねばつかり…「あんなさい。
今日は切ないです。

迷子【アスシカ】

愛してゐる。

愛してゐる。

愛してゐる。

愛してゐる。

愛してゐる。

愛してゐる。

愛してゐる。

愛してゐる。

愛してゐる。

どんなに思つたつて

あんたには

届かないんだよ。

あんたは白い骨になつて

土の上に小さな墓を残すだけとなつた。

紅さんが墓の前で静かにたつてゐる。

紅さんのお腹の中にはあんたの忘れ形見が息づいていて、その子のために俺はかつこいい大人にならないといけない。

でも、なれそうにないんだ。あんたのことを思に出すと二つの間に

か涙が出てるから。泣き虫はかつこいい大人になれないんだよ。愛していたのではなく今も愛しているから。これがどれほど苦しくて死にたくなるか分かるかい？ああ、そうか。あなたは逝ってしまうんだつけ。

あんたが生きていた頃でさえ、伝えられなかつたのに、今すぐに伝えたいと思うのは罪だらうか。オレは愛して伝えられなかつたからその罰を受けるようだ。その罪の代償としてオレは大人になつていかなきやいけないなんて。

あんたの火の意志を受け継いで忍として生きる。

戦つて戦つて戦つて…そして死ぬんだらうな。死んだらあんたのところに逝けるのか。たぶん無理だらうけど。愛を伝えられなかつたオレがあんたの側にいる資格なんてないから。神様なんかに許してもらいつつもりなんて無い。

冥界の王ハデスよ、許したまえ。

我を地獄に落としたまえ。

どうか、愛することを忘れさせて下さい。

（伝えられなかつた愛は行く先を失つた。）

迷子【アスシカ】（後書き）

誤字脱字など申し訳ないです！

戻らない世界「アスシカ」//A sense of guilt「ハボロイ」

アスシカでシカマルの1人語りの寂しいかんじ//鋼の鍊金術師・ハボロイでロイ視点の二つになります。

戻らない世界【アスシカ】//A sense of going back【ハボロイ】

戻らない世界

【NARUTO・アスシカ】

アスマが

死んだ。

オレの大切な人が

死んだ。

もう会えないし

声を聞くことさえできない。

もつと愛されたかった。

もつと愛したかった。

いつも俺は気持ちを伝えられなくて、それでもアスマはそつと笑つて愛してるぜつて言つてくれた。でももうその言葉は聞けない。

泣いたつて

叫んだつて

アスマは戻つてこない。

一度離してしまつた手のぬくもりを再び感じる」とはない。

ここが壊れてしまつた。愛する人を失つて、穴が空くどころかここ

が全て消えてしまつたようだ。

短くなつた煙草を灰皿に押しつけて、苦いものを飲み込む。

やつぱりこの味には慣れないみたいだ。

A sense of going back

【鋼の錬金術師・ハボロイ】

罪。罪。罪。

もつと貪こきれないほど、罪に縛り付けられてくる。

愛。

愛。君を狂わせてしまつてしまへ、愛に捕らわれてこる。

罰。罰。罰。罰。

先が見えないほど、焰の烙印に焼かれ続ける。

* * *

「ほんとうに、オレの」と愛してますか?」

「ああ。」

「ほんとうに。」

「ちがうんだ。愛してこらぬ、ジャン。」

そんな会話をしつつ、私の狗は舌を含んだ獣の瞳で見つめつづく。

それは、愛し合つ図。今日も私は沈んでいくつだ。

* * *

私は彼を

ほんとうに

愛しているのだろうか。

己の罪を

愛にすりかえて

罪の代わりに

彼を愛するのか。

自分でも分からぬほど

真っ赤な

過去。

(罪、愛、罰。一番の権力者は意志を持つ罪。)

戻らない世界「アスシカ」//A sense of guilt「ハボロイ」

初鋼鍊です。緊張しますねー

キスマークなんてこらなこせ「アスシカ」（前書き）

アスシカです。またこのじゅですいません…。内容ですが、まあ甘い感じですかね！？それではどうぞ！

キスマークなんてこらなこせ「アスシカ」

オレはやつとのことで任務を終わらせて家に帰ってきた。アスマは一足先に帰つてきたりじへソファで麦酒を飲んでいる。

「お帰り、シカマル。」

まだまだアルコールは回つていないみたいだ。声もしつかりしてゐる顔も赤くない。

「ただいま。あ～疲れた疲れた！」

観察したことを気づかれないように誤魔化す自分。だつて、こいつが酔うと激しいからさ。確認とかないと…。アスマは洗面所の方を指さして言った。

「風呂入つてゐるぜ。」

「おひーサンキュー」

たまにはゆつくり風呂でも入るかあ。我ながら親父くさいな。でも、明日は久しぶりの休日だしだらだらするぜ！

そんな事を考えながら湯船につかる。そして濡れた髪を少しだけ乾かして寝室へ行つた。

「…ひるせえ。」

寝室に入るとアスマのいびき。まつたく寝ねーじゃねえか。ぶつぶつ悪態を付きながら布団に潜り込んで、さあ寝よう！としたら背

後から抱きしめられてしまった。

「あっ…ひあ…」

「いいだら…シカマル…」

そのアスマの声にオレは頷くしかない。いつもより低くて脳の奥に響く甘い声。こんな声で囁かれたら拒否なんてできるわけないだろ？

「はあっ…くすぐったい…つーのつー…」

いくら抗議の言葉を言つても通じないらしい。アスマの唇が首筋あたりでさわさわと動いている。なんだかくすぐつたくて、気持ちいい。体の向きを変えられてアスマと見つめ合つ。すると今度は鎖骨のあたりに唇が吸い付いてくる。

いつもアスマはオレの身体にキスマーカをつけたがる。まるで自分の物だと言わんばかりに。

「んっ…」

徐々に首から顎に移動して唇にキスされた。口には出さないけれど、キスマーカよりもこっちの方が好きだ。お互いの舌を絡めるとなんだか頭がぼんやりしてくる。そしてアスマが頭を引き、かすかに音を立てて唇と唇が離れる。もつと欲しい、と唇を追いかけてしまい、顔が赤くなつたのがわかつた。

「…いいか？」

アスマが急に真面目な顔になつて聞いてきた。まあいつものことなんだけどな。いこよ、なんて恥ずかしすぎて言えるわけがないから

黙つて首に腕を回す。やつしてオレはアスマに一晩中愛された。

くそつー任務がないからつて調子に乗りやがつて。腰が…。

「アスマあー」

こんな日はだらだらするしかないな。オレはやつひつて同じベッドの上にうとうとしているアスマに話しかけた。

「ん~?」

寝起きですけど何か、と言わんばかりの顔と声。こんなやつでも愛しいと感じるのはオレがアスマを想っているからかな。

「キスマーク、つけんなよ

見えると疑われちまうからな。この前はなんとか誤魔化したけどさ。アスマはちょっと悲しそうな顔で聞いてきた。

「嫌か?」

そんな事ある訳ないだろ?オレはあんたが一番大切なんだ。

「んなわけねえだろ。」

「…本当に?」

ぐこつと顔を近づけて少年みたいな瞳で見つめてくるアスマ。ああ、

「オレは」こつに心底惚れちまつたみたいだ。

「オレはあんたのものだから心配すんな。」

「なつー。」

キスマークなんてもんいらねえからよ、オレの唇にキスしてくれ、
アスマ。

心の中でつぶやいて、ほんのりと頬を赤くする恋人にそつと口付け
を。

キスマークなんてこらなこせ「アスシカ」（後書き）

あれ…甘くない…？すすすいません (*ー*・) もシリクエストあ
つたらどうや！ w

ト克上といひ「カカイル」（前書き）

初！力カシ×イルカです。下克上になつてゐるか分かりません…。
またぶん甘いですね。どうぞお楽しみ下さい！

下克上という愛「カカイル」

ガバツ！

ドスン！

—
h?
—

「カカシさんつ！」

「イルカせんせつ！？どうしちゃつたの？」

一
か、
カカシさんか
」

「オレ、何かした?」

「と云ふがくじはひとしきくださいいつ……」

「うわっ！」

一力カシさんっ！」

「イルカせんせつ！うつう馬乗りなんて破廉恥な！！」

語尾がビックリマークだらけのこの問題の原因はつっこみ口のことであつた。

六
六
六

「今日はだめですよ。」

ベッドの中でじっと見つめてくるカカシにイルカが言つた言葉である。明日は一人そろつて休日というかなり珍しい日。さあ今日明日の2日間楽しみましょ、と言つカカシにイルカはNOと返事をしたのだ。

「えええーー！？なんですかあーー！？」

せっかく明日は休みなんだから愛し合いましょうよー、と満面の笑みで言われ、落とされそうになるイルカだがそこは持ちこたえた。体をベッドの外側に向けると背後から腕を回される。そして呟いた。

「だつて…カカシさんがオレのこと好きなのかなって思つて。身体だけ、ではないと分かっているんですけど…」

イルカは背中から回された腕がふつと離れたのを感じた。そして小さな声でカカシが言つのが聞こえる。

「先生…今日はもう寝ましょうか。」

「…はい。」

カカシの言葉よりも小さな声で、ごめんなさいと口にしてイルカは眠りについた。

＊＊＊

そして、朝の大騒動。

イルカはまだ眠っているカカシに馬乗りになろうとして、気付かれ

てしまつ。ベッドの上で何分か格闘した後、やつとの事でイルカがカカシの上に跨ることに成功する。下になつたカカシは顔を真つ赤にしているが、もちろん当の本人もだ。

「破廉恥じゃありません！」

「じゃあ何なんですか！？」「

その質問にイルカは黙り込むがカカシを押さえつけていた手を離して話し始めた。

「…カカシさんは本当にオレのこと大切にしてくれているし、オレも貴方のこと大好きです。でも不安になつちゃうんですよ…オレ、男だから…」

イルカは一回言葉を切る。カカシはじつと見つめたまま何も言わない。

「それで…オレから誘つて拒否されたら貴方の側にはいられないなつて思つたんです。だからこんなことを…。」

「ごめんなさい、と言つてカカシから離れようとするイルカ。しかし、カカシは突然その手を握り離そつとしない。

「カカシ、さん…」

「オレが先生のこと逃がすと思つ？貴方のこと愛してゐる。ずっと離さないから。」

碧と紅の瞳に射抜かれた上に、ストレートな愛の言葉。

にっこりと笑うカカシにそつと抱きついてイルカは言った。

「…嬉しいです。」

もうそれ以上は言葉にできなかつた。言葉に乗せられるような思いじやないから。言葉は必要ない。イルカはそつ思つてカカシに優しく口付けをした。

「ん…」

いつもカカシがするような舌使いでキスを続けるイルカ。それは甘く深くなつていく。

唇と唇が離れて2人は見つめ合つ。

「…オレ、男ですけど本当にいいんですか？」

少しだけ首を傾けてイルカが聞いた。その頬は赤い。その質問にカカシは微笑みながら答えた。

「当たり前でしょ？ だつて愛してるんだから。」

その答えに満足したのかイルカはベッドへ突つ伏す。カカシはイルカが乗つていたあたりに体温の残りを感じ、ニヤニヤしている。

「ね、イルカせんせつ… もう止まりませんよ？」

カカシはそう言つとイルカをぎゅっと抱きしめる。2人はお互いの温もりを感じて口づけを交わした。

（2人の未来にある物は、愛とほんの少しの涙。）

ト克上といつ愛「カカイル」（後書き）

いやーカカシ先生ぶつ壊れていますね。あ、イルカ先生も壊れました。
といつか壊しました..。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3169f/>

二次元の館

2010年10月11日02時04分発行